



2003年

SORA 4号

晴夜 (4) | 1

柴田 佐知子

ふるさとは障子を洗ふ流れあり

霜降の日向に移す小鳥籠

猪垣の端より暮れてきたりけり

昼月に波の揃ひし千鳥かな

墓原は大きな日向鶺鴒渡る

屋根寄せし島の入り江も師走かな

凧や捌けば魚のどれも白し

—「俳壇」十二月号より—

ひだまり

高倉 和子

日だまりとなりし棚田や鷹渡る

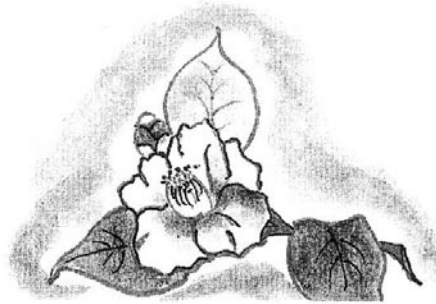
稲刈つて山の大きくなりけり

牛小屋を今は使はず秋桜

茎青きままに枯れゆく曼珠沙華

折るるほど撓みし竹や秋土用

低く小さく稲架を組みたる棚田かな



崩れ築けば立つ川となりみたり

木の実拾ふ良きこと一つ増えしごと

秋冷や肩を寄せ合ふ山ばかり

石仏に雨あと著き寒露かな

鶏頭の凝りたる色となりにけり

望の夜や母を撫でゆく風のあり

拭きあげし畳に秋の風新た

手鏡に微熱のありし秋思かな

もてあます夜長にもまた慣れにけり

棚田に咲いた彼岸花がきれいだったと母から電話をもらった次の日曜日、早速出かけた。たまたま読んだ情報誌にも夕日に映える棚田と彼岸花の美しさが書いてあった。当日は天気にも恵まれ期待に胸を膨らませていた。

しかし、見事に期待は裏切られた。棚田一面に咲く彼岸花はことごとく枯れていた。あんなにたくさんの彼岸花を見たのも初めてだが、いつせいに枯れた彼岸花を見たのもまた初めてだった。数日前まではさぞ壮観であっただろう景色を想像しつつ、畦道を歩くのもけっこう楽しいひとときだった。稲を刈ったばかりの匂いと棚田に組まれた小さな稲架がとても印象に残った。

父逝きて

荒井千佐代

早星祈りの数は怒りし数

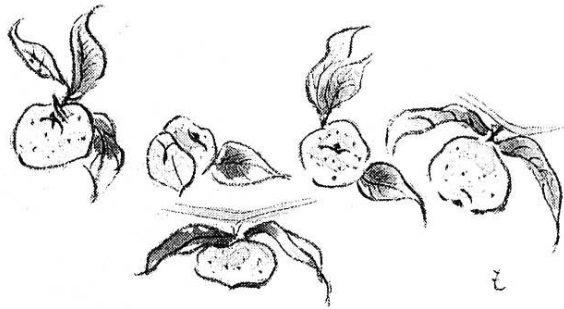
露草の小児病棟包囲せり

峰雲や二階より乗る離島便

おしろい映し蜚路地の道路鏡

父母の墓つつむ九月の海光よ

殉教もころびも我が祖曼珠沙華



十月に長男の住む横浜に逗留した折、
数年ぶりに夫の里である川越を訪ねた。
夕方五時頃に着いたが、川越祭を明日に

棧橋の揺れかすかなる帰燕かな

鰯釣りの巖マリアを一巡す

海上空港へ一本の橋いわしぐも

鴉の贄帽子を被りなほしたる

彼の捨て舟ことに木の葉の溜るなり

船波の浦にひろがる後の月

父逝きてひととせ柚子の歪な実

鍵盤キイひとつ沈みしままや稲の波

直立の海底の藻や秋暑し

控えた緊張感のようなものが漂っていた。蔵造りの町並の紅白の幔幕には、暮れ際の日がまだうつつすら射していた。絢爛豪華な山車を見るのは初めてで胸が高鳴った。

実家のある喜多町も昨年は山車を出した町で、蔵造りの町並の端の方に位置する。家は古い商家で、ちょうど博物館に納めるという桶のような物を造っていた。TVや広報誌等に時々登場する希少な桶作り職人の店である。

二時間半しかいられなかったが、気になっていた両親の墓参りができほつとした。夕食は向かいの（江戸時代からの旧家そのままの）小料理屋で、「喜多町御膳」を戴いた。久し振りの兄夫婦との話に花が咲いたのだが、生憎私に時間がなく中断させてしまい悔やまれた。姉からの土産「亀屋」の芋菓子を提げ、東京のホテルに帰り着いたのは九時過ぎだった。慌しかったが、心安らぐ一時であった。

万年ベンチ

高 千夏子

横浜三句

「帝蚕倉庫」の文字かすれをり秋のこゑ

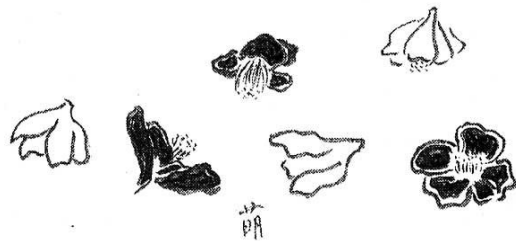
他殺・溺死・自殺露の外人合祀墓

幼子の靴底の減りつゆけしや

榎榼熟れつゝ運慶の力瘤

この呪ひ人形今年藁らしく

草紅葉喪服すがたの子らが過ぎ



やんま噛みしほどの痛みの手術終ゆ

山帰来の實が家路へとうながせり

黄落のただなかにあり学祖像

忘れえぬ一信のあり天の川

落葉しつくしスカーフの馬具の柄

防砂林裏の苗木々冬に入る

万年ベンチ指名されをり冬の蜂

当日消印有効投じ返り花

雪霏々と一茶閨房日記かな

旧友の連れ合いは、人間国宝だった長唄の和歌山富十郎の一番弟子。現役の長唄師匠である。(相弟子だった若山富三郎は姓名を替え、俳優となった)この長唄師匠が言うには、伝統芸は師の真似をいかに上手にするかが、修行の眼目と言う。自分を出しつつ、師の芸風を尊守するのは大変との事。伝統芸で、師の真似をしてはならないのは、浪花節だけと言う。この話、俳句にもあてはまる。季語と師風を踏まえつつ新しみを出す。難しい!

花野

小林朱夏

黄泉の国父のビールは誰がつぐ

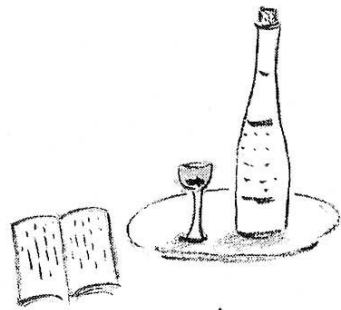
蓮の水一輪ごとに静まれり

瓢箪の定型をもてぶらさがる

青北風や御手差しだすマリア像

修道士秋耕の一日暮れにけり

隣隣より高くひらきし秋日傘



も

十月に入つてすぐの休日に別府温泉へ
行きました。土曜日は早く出発したので、
安心院まで足を伸ばしたら、思いがけず
あの北海道で有名なトラピスト修道院の
クッキーの看板が目に入り、立ち寄るこ
とにしました。

別府湾を見下ろす小高い丘に男子の大
分トラピスト教会がありました。両手を
柔らかく差し伸ばされたマリア様の像が
立ち、クッキー工場と販売所、その奥に

返事せぬ夫に怒りし残暑かな

現世の子であり母であり花野

稲妻の打ちし山ごと飛び上がる

家人とは夫のこと言ふ秋刀魚焼く

機関車の引く最後尾の秋思

知るはまた厄介であり蚯蚓鳴く

毒茸思ふ存分笑ひけり

稲の花稽古の続く村神楽

秋の田を領主のごとく高きより

修道士の方が生涯を過ごされる建物が秋の日差しの中にありました。試食用のクッキーをいただき、資料展示室を見学しました。

朝三時の起床から夜八時の就寝まで、きめ細かいスケジュールが毎日変わることなく一続き、神へ捧げた愛ですべての人々の救いと平和のために「祈り・働け」の修道生活を送られるとのこと、胸に迫ってきました。とても美味しいクッキーとイタリアの修道女が作られたクリスマスカードを記念に買いました。

翌朝はゆつくりと露天風呂につかった後、宿の近くを散策していたら、「古池や蛙飛び込む水の音」の芭蕉塚と石灯笼にその蛙が掘り込まれているという栄昌山西法寺の前に出ました。まさに池に飛び込もうと窺っている蛙の先には沢山の亀が甲羅干しの最中でした。樹齢二百年という藤の木に見とれていると、金木犀の香りが流れてきました。